

「Z会の映像」 教材見本

こちらの見本は、実際のテキストから1回分を抜き出したものです。

ご受講いただいた際には、郵送にて、冊子をお届けします。
※実際の教材は、問題冊子と解説冊子に分かれています。

教材見本内の「添削課題」は、演習問題として扱っており、
添削指導はおこなっていません。ご了承ください。

二十一世紀では「共生」が社会づくりのキーワードになると言われている。では、どのような共生が重要になり、そのために何をしていくべきであろうか。具体的な事例とともに六〇〇字以内で論じなさい。

【添削課題】

出典：オリジナル問題

解答

【文章例①】

社会を構成する人間にさまざまな人がいる以上、社会づくりを進めるにあたっては、社会的弱者の存在を無視することはできない。私の住んでいる地域のスローガンの一つには「障害者が暮らしやすい街づくり」というものがある。「共生」というと、私自身もついで何か特別なことをしなければならぬような気になってしまうのだが、実は身近なことの積み重ねが、本質的な「共生」につながるのではないだろうか。

先日、駅近くの歩道上で、とめてある自転車が邪魔で移動できない車椅子の人を見かけた。自転車をとめた人も、車椅子の邪魔をしてやろうという考えがあったわけではないだろう。しかし、実際には、車椅子の人の移動手段をその放置自転車が奪ったことになる。何もこの自転車だけに限らない。自分の日々の行動が、他の人の障害物を生み出す可能性があるのだ。

このような物理的、さらには精神的な障害物をつくりだしているのは、他者への無関心であり配慮のなさなのではないだろうか。あらかじめ障害物になるものを置かないという気遣いがあれば、障害者には、障害のない人と同じように街を歩き、独自の能力を発揮する道が開かれているのだ。これは障害を持たない人がそれぞれ自分の都合でしかものを考えないようではまず実現しないことであり、福祉サービス等の制度的な面をいくら整備しても、本当の「共生」には結びつかないのである。

【文章例②】

二十世紀は科学技術の時代であった。現在、インターネットから遺伝子組み換え技術に至るまで、私たちの生活はさまざまな科学技

術の成果によって成立している。情報伝達や生命工学などの諸分野を始め、二十一世紀に私たちの科学技術への依存度はますます高くなるだろう。そこで私たち一般市民が科学技術とよりよく「共生」するためにすべきこと、目指すことを考えてみたい。

まず第一に、科学技術に関する知識と情報を得ることだ。高度に専門化した科学技術を、専門外の人間が原理から理解することは難しいが、ここで必要なのが、専門家による市民と科学技術の仲介である。専門家による解説は、若年層の理科離れにも歯止めをかけるし、一般市民からの意見を科学技術へ反映させるきっかけにもなるだろう。また、デジタルデバイドのような市民間における科学技術の習熟度の格差を、減少させるようにはたらくと思う。

第二に、科学技術の利用に伴う危険を回避することだ。今後は前世紀に使用した科学技術の思わぬ弊害が現れる可能性が高い。そうした危険を予測し、それに備えることが必要だ。また、身体や環境に悪影響を与える恐れがあるものや、従来の社会規範や倫理観などを大きく変化させる可能性のあるものの開発や使用に対して、市民が議論をする場を設けることで、科学技術と人間との「共生」が初め可能になると私は考える。

解説

「共生」というキーワードについて

今回の課題について考察を始める際に、まずしなければならないのは、「共生」というキーワードの定義づけであろう。

まずは「共生」の意味を辞書で確認しておこう。

①ともに所を同じくして生活すること

②異種の生物が行動的・生理的な結びつきを持ち、一所に生活している状態（『広辞苑』）

とある。本来は生物学分野でよく使われる用語であり、「共棲」と表記することもある。二種間で両方または一方が利益を受けて、どちらも害を受けないような関係を言い、学術用語としての相利共生や片利共生だけを意味して用いる場合も多い。

このような意味を持つ「共生」ということばを、社会づくりを指す際の用語として使用するとき、諸君はどのようなイメージを持つだろうか。どのような相手との、どのような関係を思い浮かべるかは人それぞれだろうが、大半が「お互いが害を受けずに仲良くやっていくような関係」といったイメージに集約されるのではないかと思う。しかし「考えるヒント」でも触れたが、実際の社会状況を踏まえて考えれば、単に「みんな仲良く生きる」とか「互いに気を配りあって生きる」といったレベルでは不十分な場合も多い。

たとえば「みんな仲良く」といった発想は、「調和」ないし「協調」といった「安定」した状況が思い描かれている場合が多いのだが、そうした「安定」状態は、安定した「閉鎖」へとつながりやすい。つまり「安定」状態を維持できるような成員のみを受け入れて、閉鎖的な集団をつくりあげてしまっておそれがあるということだ。したがって、「共生」をキーワードに社会づくりを目指すならば、この点を考慮しつつ「閉鎖的な状態⇨理想的な共生」ということにならないよう注意しよう。言い換えれば、共生する相手についてよく考える必要があるということだ。「共生」というからには、そこで生きているのは異なる存在同士であることが前提であり、そしてお互いを「異なる存在」たらしめている性質、つまり「異質性」についてよく考えなければならぬ。これを無視したり、消滅させようとしたりすることは決して「共生」ではないのだ。

具体的な事例を取り上げる

では次に、こうした定義に基づいて、現代社会の中から具体的に何と何の「共生」が考えられるかを考察しよう。今回のようなテーマ型の出題では、読解内容を考察の第一歩にすることができると課題文型小論文とは違って、自分が日頃見聞きしたこと、経験したことをもとにしながら考察を展開しなくてはならない。

考察の材料として選ばれた事例は、諸君の問題意識の深さや関心領域の幅広さを如実に示すものであり、出題者もそれを測るためにこうした出題を課すのである。そこで、題意に沿った適切な事例がすぐに思いつくように、常に社会の出来事には目を向けておいてほしい。新聞やテレビのニュースに毎日接し、情報収集することを心がけよう。その際、やみくもに情報を集めて暗記するのではなく、ある事件や報告をひとつの「観点」からまとめてみよう。たとえば、「国際化」という観点から見ると、この事件はどのようなようにまとめられるか。あるいは「情報化」という観点ではどうか、という具合に。もちろん、すべての事例をまとめられるような観点ばかりではないが、今回のようなテーマ型には、こうしたある観点からの現象把握という訓練が有効である。そして、この観点は、諸君が志望する学部・学科で出題された小論文の過去問題を見て、よく取り上げられるものを選べばよい。

さて、「共生」というテーマから考えられる具体的な事例は、現代社会の中にはたくさんある。たとえば、「若者と高齢者」の「共生」、「男性と女性」の「共生」、「人間と自然」の「共生」、「科学技術と人間」の「共生」などなど、身近なところから挙げることができるだろう。

こうした例からもわかる通り、「共生」の事例として取り上げる対象は無数にあると言ってよい。ただ念頭においてほしいのは、設

間にあるように二十一世紀、つまりこれからの社会にとって重要となるような「共生」を取り上げるということ。そして、その「共生」関係をとり上げた際、君自身の立場や問題意識がよく見えるようにすることだ。

以下、具体的事例を取り上げた際にどのような点に注意して考察を進めたらよいか挙げておこう。

・「共生」する上での問題点を探る

たとえば「若者と高齢者」が共生していく上で、どのような問題が生じるだろうか。問題の原因は両者の「違い」にあるはずだ。肉
体面、精神面、経済面などさまざまな違いに目を向けてみよう。具体的には、共生する者の一方にできて、一方にできないことは何か
を考えてみるとよい。また、ここでは二十一世紀に進行する「少子高齢化」という社会状況も意識したい。

・常識や慣習を疑う

「共生」について考える際、先に述べたような「みんな仲良く生きる」という結論に陥ってしまうのは、共生する者同士の関係の
あり方を根本的に考えていない場合が多い。たとえば「男性と女性」の共生を考える際に、「お互いの長所を生かして協力していけば
よい」といった一般論を主張してもあまり意味がない。性別による役割分担がどのような常識や慣習に基づいているのかなど、取り上
げた事例に特有の問題について考察してみることが必要だ。